

老舎研究会会報 第17号

胡絮青女士 題字

老舎研究会の生まれる少し前

日下 恒夫

もう20数年もむかしのこと。

ある日、学研の辞典編集部の中川久彦さんから、老舎という作家のことを知りたい、また全長編の梗概を書いてほしいとの命を受けた。実は、大学院生の頃から藤堂明保編『学研漢和大辞典』の下請け仕事をしていたので氏はずっと上司であった。上司の命には逆らえない。

深い考えもなく応諾して以来いわば編集長の秘書というか影の相談役となってしまった。それ以来、必死に泥縄の勉強をするはめになった。その後、藤堂先生の後押しもあったのであろう、『老舎小説全集』の企画が通り、途中から私も表に顔を出して参加することになった。

話が決まったのち、胡絮青さんと舒乙さんを学研が日本に招待。その歓迎宴で、「祥子の歩いた道を歩く旅」の企画を中山先生が発案された。

最初の旅はたしか82年の春。それに参加された柴垣先生の「焼けぼくいに火がつかました」という言葉が、83年に老舎研究会という形になったことをご存知の方も多いかもしれない。

その後も何度か行われた「老舎の旅」の参加者のなかから多くの老舎愛好家がこの研究会の初期からの会員になられた。

こんなふうにと考えると、学研の老舎小説全集

の企画が通らなかつたら、老舎の歩いた道を詳細に調査され始めたばかりの老舎夫人と子息の来日になかつたら、中山先生が「老舎の旅」を企画されなかつたら、柴垣先生がその気になれなかつたら、この研究会は果たして生まれたかどうか。生まれていても、ずいぶん遅くなつたか違った形になっていたかもしれない。

まもなく20周年を迎えるときに世話人をお引き受けすることになって、いささか自慢めいた話で恐縮ながら、この研究会が誕生する少し前の些事をふと思い出した次第。

* * * * *

〔蛇足〕この会は、老舎読みやら老舎好きが年に一度相集い、いわゆる玄人素人の別なく、自由気ままに老舎とその周辺について語り合う会です。設立のきっかけから考えてみても、研究会というより愛好会の名が相応しいかもしれません。そのほうが純な感じがしません。

そこで、会の運営も単純素朴にまいます。なにしろ老舎は北方民族の出身、ここでは単純素朴はほめ言葉。専門の研究ばかりでなく、時には遊び心を盛り込んだり、いっそ真面目に勉強会というのも悪くないでしょう。

とはいえ、発足当時の若者も今では中年また熟年。最近、遊び心や単純さをお忘れなのでは？この会もまた同じ、もっと新しい血を注ぎ込みたいものです。身近におられる愛好家に声をおかけいただいて、老舎愛好家の環を広げていこうではありませんか。

蛇足ながら新世話人の挨拶でした。

国際老舎学術研 討会に参加して

布施 直子

本年四月二日から四月六日まで、中国安徽省蕪湖市で「第三次国際老舎学術研 討会」が開かれた。

三日、四日の二日間が学術研 討会。五日、六日はその一環として、大型バスで黄山に向かい、途中黟県と歙県で独特の形状の集落が現在も人々の生活の場になっている西递村や宏村を見学し、黄山へ登った。

論文の用意もなしに参加させてもらったので気が引けたが、日本からは杉野元子さんが「九十年代後日本の老舎研究」という題で発表された。

老舎研究者の方々の発言に直接ふれることができ、また会に参加した方々と全日程の行動を共にさせてもらい、濃い交流をしたような充実感を感じている。会場では発言の何分の一しか聞き取れず、配られた論文をあらためて読むと、発表者が話されたときの様子を重ねて、論文の問題意識にも親しみがもてる。

今回の国際老舎学術研 討会について、その概要を以下に記したい。

開催場所は安徽省蕪湖安徽師範大学と案内されていたが、安徽師範大学は平常の授業期間中で、学術研 討会の会場及び宿泊所には蕪湖市内の海螺大酒店が使われた。

参加者は中国国内各地から 60 数名、国外からはドイツ 1 名（上海在住）、ロシア 2 名、日本 4 名、全体で 70 名弱の学術研 討会だった。四月二日は受付のみで、三日、四日の両日、昼食をはさんで午前午後の通しで学術研 討会が行なわれた。

計画表と資料が前もって配られ、一人 20 分の発言時間で、三、四組ごとに司会者が交代して、発言者の紹介と発表についてのコメントを

した。

4 月 3 日 開幕式

1. 開会の辞

中国老舎研究会会長 呉小美教授

2. あいさつ

安徽師範大学学長 丁万鼎教授

国务院学位委員会委員、

吉林大学元学長 柳中樹教授

ロシア 聖彼得保国立大学

A. Rodionov

3. 発言者と題目

(午前の部)

① 舒 乙

「老舎独有的描述窮人特地的分析」(談)

② A. Rodionov

「老舎創作與英国作家卡洛尔」

③ 呉小美・古世倉

「拓展与沉寂：近十年的老舎研究述評」

(午後の部)

① 謝昭新

「論老舎創作芸術価値」

② 杉野元子

「九十年代後日本の老舎研究」

③ 趙志忠

「《正紅旗下》民族文化論」

④ 石興澤

「老舎與民間通俗的關係」(談)

⑤ 徐德明

「《離婚》(人物形象 其他)」(談)

⑥ 範亦豪

「“悦耳的”老舎」

⑦ 孔慶東

「老舎の大衆文化意義」

⑧ 呉永平

「再論巴迪先生的老舎研究」

4 月 4 日

(午前の部)

- ① 郝長海
「漫談老舍創作的民族文化大衆化」
- ② 馬 雲
「老舍的健康與創作」(談)
- ③ 凱 茜 (ドイツ)
「老舍研究との出会い・今後の課題」(談)
- ④ 張桂興
「試論 20 世紀老舍資料研究的成就」
(論文提要)
- ⑤ 劉誠言
「關於老舍之“写家”說」
- ⑥ 王曉琴
「老舍與現代民族精神構造」(論文提要)
- ⑦ 王玉琦
「虎妞是誰？」(談)
- ⑧ 李 玲
「老舍小説的性別意識」
- ⑨ 湯晨光
「老舍與通俗文学」(談)
- ⑩ 王衛東
「从叙事角度解讀老舍小説的風刺芸術」
[備考]: 資料なしに発言されたケース
に(談)と注記。

(午後の部)

全体会で、自由に発言する討論だった。老舍作品をどう読むか、テレビ化された老舍作品(「離婚」、「我這一輩子」など)についてのよしあし、老舍作品を若い読者にどう受け継がせるか、「隊伍」を拡大しなければならぬ、などさまざまな発言があった。

なお、舒乙氏から、中山時子先生のご病氣回復を祈るお見舞いの手紙を「第三屆老舍国際研討会」として送る提案があり、文案を舒乙氏が読み上げた。

四日夜の夕食時、にぎやかに打ち上げの交流会があり、五日朝早く黄山へ向けて出発した。

なお、上に挙げた発表の内容の紹介は、紙数の関係でここに詳しく紹介する余裕はない。それは研究大会(8月1日、於関西大学)での報告に譲ることにするが、ただここに列記した題名からも、最近の老舍研究が、「個性化と多元化の時代」を迎えたことの一部を窺い知ることができよう。

老舍と吳祖光、新鳳霞夫妻

平松 圭子

「中国戯劇」2003年第5期に、吳祖光氏の死を悼む文章が二つ載っている。亡くなられたのは4月9日、享年86歳。

吳氏は、1986年に中国で老舍研究会が結成されたとき初代会長になられた人である。劇作家として出発し、映画のシナリオ作家、監督を経て、解放後も映画制作にかかわり、京劇の改編も書いている。また演出家としても有名である。

彼の前半生は多くの同世代の中国知識人と同じように現代史と共に歩んだ放浪生活のようにみえる。

江蘇省出身だが、北平の中法在学中に日中戦争が起これ、学業半ばで南京国立戯劇専科学校の講師になった。

戦争が拡大するにつれて、学校は長沙、重慶、四川江安へと移転、彼もそれに従い移動した。

41年に再び重慶に来て、中華劇芸社、中央青年劇社でドラマの改編、演出を手がける。その後、一時期成都に移り、44年に又重慶にもどって、丁聰と雑誌『清明』を出したり、『新

民晩報・副刊』の編集に当たった。

彼が老舎と知り合ったのはこの二度の重慶滞在時であろう。

評劇の名女優、新鳳霞を呉祖光に紹介したのも老舎であり、二人が結婚の際、新婦の“主婚人”としてサインしたのも老舎であった。

1957年呉祖光は右派として批判され、60年まで北大荒で労働参加、妻の新鳳霞の環境も変わり、彼女は呉祖光愛蔵の書画を骨董屋のいわれるままに売却してしまった。

呉祖光がいなくなったあとの彼女を老舎はしばしば励まし、呉祖光の安否を気遣っていたようである。

後年、新鳳霞は、当時人々が積極的に彼女とつきあおうとしなかった時期に、以前と変わらず親身に声をかけてくれた人であると老舎について語っている。

新鳳霞が売ってしまった書画の中には、齊白石が呉祖光のために画いた「玉蘭」の絵も入っていた。呉祖光が北京に戻ってきてからのこと、或る時夫妻で散歩中、王府井で偶然老舎と出会った。老舎は二人を自宅に招き、齊白石の「玉蘭」を出してきて二人を驚かせた。老舎は書画屋でたまたまその絵を見つけ、呉祖光旧蔵と知り、買っておいただった。その絵に老舎は「還贈祖光物帰原主矣」と添え書きした。

この微笑ましい話は、呉祖光「金子做的心」、新鳳霞「我思念老舎先生」（以上二篇は『老舎和朋友們』（1991年10月、三聯書店）に収める）と「懷念老舎先生」（『新鳳霞回憶録』1980年10月、百花文芸出版社）に詳しい。

1998年、新鳳霞が亡くなってから間もなく呉祖光は脳血栓を患い療養していたとのこと。老舎と親交のあった人が又一人去り、一時代が過ぎ去った感が深い。黄泉下で愛妻や老舎夫妻と再会を喜びあっておられることであろう。

（2003年7月10日）

老舎関係文献略目（6）

倉橋 幸彦（編）

【1999年・補正】

弓削俊洋「老舎の相声—相声論及び技法に関する考察」『愛媛大学法文学部論集（人文科学編）』第6号（2月10日）

p. 175—194

→『中国関係論説資料』第42号〔第2分冊(上)〕（論説資料保存会）

p. 166—175

◆『老舎関係文献略目（4）』（本誌第15号）で1998年としたのを訂正。なお、「老舎作 相声作品目録」（p. 176—177）を付す。

山口 守「老舎生誕百周年 革命は消え近代は残る」『ユリイカ』4月号 第31巻 第5号〔通巻417号〕（4月1日、青土社）p. 258—259

*「その歴史のアイロニーを強く意識させられたのは、同じく生誕百周年事業のひとつとして二月上旬北京で上演された京劇版『駱駝祥子』を見た時のことである。なぜ京劇という伝統様式に乗せてこの小説を舞台化しなければならないかはさておき、感慨深かったのは“現代京劇”と銘打っていた点である。文化大革命時期には『紅灯記』など所謂“革命現代京劇”が盛んに上演されたものだが、九〇年代の中国では“革命”は消え、“現代”（日本語では近代に相当）だけが残っている。社会主義経済から市場経済への移行によってもはや“革命”は不要なのか、“革命”は成功裏に終わったが“近代”は続行中なのか、“革命”は“近代”より遠い過去なのか、あるいはその逆か、いずれにしてもアイロニーの種は尽きない。」（p. 249）

周 啓虹「中国語の“動詞+的”構造の日本語訳について—『駱駝祥子』の分析—」
『麗澤大学紀要』第68巻（7月）
p. 215—223 *未見
→『中国関係論説資料』第43号〔第2分冊（増刊）〕（論説資料保存会）
p. 446—450

弓削俊洋「建国後の老舎に関する考察 — 「歌徳派」作家の実像を求めて —」
『愛媛大学法文学部論集（人文学科編）』第7号（9月29日）p. 89—108
→『中国関係論説資料』第43号〔第2分冊（上）〕（論説資料保存会）
p. 71—80

◆『老舎関係文献略目（4）』（本誌第15号）で1998年としたのを訂正。

▽1. 「歌徳派」作家と胡風宛書簡／2. 「時間をください！」／3. 「完全なる自由を！」／4. まとめ

【2000年・補】

岡部謙治「『茶館』数来宝の音楽性」
『日中言語対照研究論集』第2号
（5月10日、日中言語対照研究会、白帝社発行）p. 91—105

緒方 昭「『四世同堂』にみる弱者への愛 — 瑞宣像を中心に —」
『國學院雑誌』第101巻第7号中国学会報』46（12月）p. 12—23

◆未見

→『中国関係論説資料』第42号〔第2分冊（下）〕（論説資料保存会）
p. 24—30

▽まえがき／一、瑞宣像の分析／二、『家』（高覚新）との対比／むすび

平松圭子「老舎「末一块錢」と C.Y.Lee “Mr.Weng’s Last Forbidden Dollar”」
『東洋研究』第138号（12月20日、大東文化大学東洋研究所）p. 13—24（左）
*「「末一块錢」のような結末の意外性は同じ頃の短編「菓」「眼鏡」「上任」などの結末にも共通するところがあり、老舎の短編のひとつのタイプといえる。この結末の意外性は恐らくO.ヘンリーの影響を受けたものと考えられる。」（p. 23）

緒方 昭「老舎文学「大衆性」の一考察 — 代表作三篇を中心に」
『国学院中国学会報』46（12月）
p. 45—58

◆未見

【2001年〈上半期〉・補】

吉川英一「老舎「陽光」について」
『文学部論叢』第71号（2月20日、熊本大学文学会）p. 21—37
→『中国関係論説資料』第43号〔第2分冊（上）〕（論説資料保存会）
p. 424—433

▽一、はじめに／二、「陽光」の構成／三、循環する物語／四、「陽光」と「月牙儿」

【2001年】〈下半期〉

『老舎研究会会報』第15号（7月27日）

▲杉本達夫「胡絮青先生を追悼して」p. 1／中山時子・平松圭子「老舎夫人胡絮青女士を偲んで」p. 1—2／大辻富美佳「北京の都市研究を通して老舎作品を読む」p. 3／花城可裕「松島を詠じた老舎」p. 3—5／杉本達夫「古書市の老舎

のことなど」p.5-6／稲田直樹「老舎を読む会の4年半」p.6-7／杉野元子「『老舎之死採訪実録』を読んで」p.7-9／高橋由利子「史承鈞《簡明老舎詞典》」p.9-10／日下恒夫「膨大と細心の「老張的治学」——張桂興《老舎研究叢書》を吹聴する——」p.10-12／倉橋幸彦「老舎関係文献略目(4)」p.12-18:【1996年補】【1997年補】【1998年】【1999年】／「老舎研究会会報(自第1号至第14号)掲載目録」p.18-20／「事務局便り」p.20

文 潔若「老舎とノーベル文学賞」

『人民中国』8月号(8月5日)p.64

◆カット写真:「自宅の庭で家族とともに」

◆筆者文潔若は、翻訳家、作家蕭乾夫人。

*「どうしてそうだったかは分からないが、話をしているうちにエイド[☆ノルウェーのシノロジスト、エリザベス・エイド。1978年訪中。]が突然、話題を変えて、老舎は亡くならなければもう少しでノーベル文学賞を受賞するはずだった、と言い出した。彼女が英語でこう言ったのを今でも覚えている。／「あの年、ノーベル文学賞を中国の作家に授けることは決まっていた。しかし調べてみたら、老舎は八月に死去していたことがわかったのです。ノーベル文学賞は生きている人にしか贈られないという規定があり、それで別の人に授けられたのです。」

**「私は老舎に二度会ったことがある。はじめは50年代の初めだった。人民文学出版社の同僚で、詩人の方殷が師範大学付属の女子中学校の女教師と結婚することになり、婚礼が、その学校の大講堂で举行された。会場に早く着いた私は、運動場に入ってきた小型乗用車から老舎が降りて来るのを見た。彼はおそらくアメリカから帰国したばかりで、洋服に革靴という姿で、物腰はあか抜けていた。婚礼の主催者として、晩婚の二人のことをユ

ーモアたっぷりに話し、出席していた女学生たちは笑い通して、雰囲気は大いに盛り上がった。／二度目は1965年5月で、中国作家代表団が訪日を終えて帰国し、中国文学芸術界連合会の講堂で報告会を行ったときだ。劉白羽がまず発言し、詳しく、すみずみまで行き届いた話をしたあと、老舎の番になった。／老舎は悠々迫らず、こう切り出した。「話すべきことは、(劉)白羽同志がすべて話してしまった。私は裏話を少々することにしよう。」「会場の雰囲気はたちまち高まった。1950年9月に仕事を始めてから、私はこんなに生き生きとした報告を聞いたことがなかった。私はそれを細かくメモしたが、残念なことに文革の時代の「殴打、破壊、略奪」の被害を受け、家の中の品物とともにメモはすべて無くなってしまった。」

[参考]「老舎の作品が大好き 岡山市雄町逢澤茂美」(『人民中国』9月号)

*「老舎とノーベル文学賞をあげたのは、わたしの青春時代は新聞、テレビ、雑誌で文化大革命の報道でいっぱいでした。そのような中で老舎の死は本当に悲劇でした。このことは随分と後に知りました。」

「老舎研究大会開く」

『日中友好新聞』第1913号

(9月5日、日本中国友好協会)〈3〉

日下恒夫「いつかは読みたい老舎」

『中国語をモノにするためのカタログ』

[アルク地球人ムック2002年度版]

(10月25日、株式会社アルク)p.76-77

*「老舎の作品は、長いあいだ日本中の中国語の教室で、いわば中国語(北京語)の教科書のように読まれてきました。古くは『紅樓夢』、そして『儿女英雄伝』を経て老舎の作品と続いてきました。日本で中国語を学んだ

人で、もし老舎を1ページも読んでいない人がいれば、もぐりだと言っていいでしょう。」(p. 76)

＊＊「ところで、いまさら老舎でもないと思う人も多いことでしょう。何しろ今の中国も北京もものすごい勢いで変化しており、この十数年の変化は中華数千年の歴史の中でもっとも激しいと言っていいでしょうから。しかし、この表層の変化だけ見ていたのでは変化そのものもよく見えません。今を知るためにも、長きにわたって変わらなかった、そして今も変わらない部分を知っておくことが必要でしょう。また老舎を読めば、今も北京の路地に住む庶民の言葉が分かるのはもちろん、民国時代の北京語、あるいはさらに古い時代の語り物の系譜にある小説などにもさかのぼることも可能です。／今を知りたい人も昔を知りたい人も、中国語を学ぶ以上は、少しでも老舎の香りを味わいたいものです。」(p. 77)

◆カット：「老舎」 「『四世同堂』原稿」

日下恒夫「猫と老舎と豆汁兒と — 胡絮青さんのことなど」 『東方』第249号
(11月5日、東方書店) p. 2-6

＊「ところで、私は学研版の「年譜」の中で、一九三四年のところに、「春のうちに、猫の小球が駆け落ちをする。」という一行を入れておいた。真面目な研究者ならこんなことを書き入れるはずはない[☆中略]であろうが、いわば一種の遊びを試みたのである。もちろん根拠はあって、老舎の『老舎幽默詩文集』の序文の最後に「舎猫小球昨與情郎同逃(我が家の猫「たま」が先日いい男と駆け落ちした)」とあるのによって書いたのである。冗談は遊び、遊びは人生の潤滑油とまで考えたわけでもないが、こっそりこんなエピソードも入れておいたのである。／だからのちに私

の年譜が中国で出版される話があり、その中国語訳の原稿を読まれたせいであろう、胡絮青さんや家族の方々から、「お前の年譜の中でいちばん面白いところは、猫の駆け落ちの箇所だ」と言われたときは、猫も注意しなだろうと思っていただけに、ちょっとうれしかった。／さて、南新街五十四号[☆済南の「老舎と胡絮青さんが新婚生活を送った家」のあった所]の話の続き。その家は不思議なことに中庭の真ん中に小さな井戸がある。不思議そうに眺めていたら、その井戸にはいわくがあるとのこと。胡絮青さんが昔を思い出しながら、懐かしそうに語られたのは、実は当時老舎がかわいがっていた猫が、この井戸に落ちて亡くなったというのだ。しかし、猫好きの老舎にそのことを言えないまま、どこかへ行ってしまったということにしたという話であった。もちろん胡絮青さんの話を信じた老舎は、序文でそのことに触れ、猫が駆け落ちしたことにしたのである。」(p. 5)

武田雅哉「火星の猫たち — 老舎『猫城記』」
武田雅哉・林久之『中国科学幻想文学館(上)』
[あじあブックス] (12月1日、大修館書店)
第六章 中華民国時期の創作SF
p. 198-200

＊「老舎は、『私はいかにして「猫城記」を書いたか』(一九三五)という文のなかで、この作品が「失敗作」「かくもくだらないもの」であると宣言している。それは主として、文学的営為としての諷刺の手法がなっていないし、ユーモアさえもないことによるという。中国の文学者は、しばしばこのように、みずからの作品をことこまかに解説したが、その真意が奈辺にあるやを見極めるには、行間、文字間にまで、しつこくうが必要があるだろう。／いずれにせよ、現代中国の小説史、少なくともSF小説史を綴る

うえで、この作品は「かくもくだらないもの」ではなくなった。特に、いわゆる「文化大革命」が終了したのち、中国で「科学幻想小説」が提唱されるようになると、『猫城記』は、「老舎のような過去の偉大な文学者もSFを書いていたのだ」として、その権威づけに引っ張り出されることになった。」(p. 198)

**「この作品がパローズの「火星シリーズ」の影響を受けたとの説もあるが、ただいまの引用〔☆『私はいかにして「猫城記」を書いたか』〕を読むと、むしろ老舎は、諷刺を目的とした欧米の架空旅行記——その傑作は、たとえばスウィフト『ガリヴァー旅行記』や、シラノ・ド・ベルジュラックの『別世界または日月両世界の諸国諸帝国』などである——を、熟知していたのかもしれない。中国でも、SFに限らず、清末小説の多くがこの体裁を好んで用いている。『猫城記』は、評価がさまざまに転じ、時代に翻弄された作品として、また、現代中国において書かれた架空旅行記として、はなはだ重要、かつ興味深い作品であるといえよう。そのせいか、日本でも、珍しい「中国のSF」として翻訳紹介がされている。」(p. 200)

◆カット：「老舎」〔『猫城記』〔☆晨光文学叢書版書影〕

◆なお、同書で老舎に言及した箇所は、他にも2箇所(p. 177・p. 218)ある。

【補・2001年再録】

牛島徳次「“普通話”と北京語〔專家漫筆—1982年6月号〕」『中国語』第500号(8月15日、内山書店) p. 13

伊藤敬一「老舎の死〔專家漫筆—1992年9月号〕」『中国語』第500号(8月15日、内山書店) p. 20

【2002年】〈上半期〉

杉本達夫「老舎の死をめぐる断想 — I —」
『早稲田大学大学院文学研究科紀要』
第47輯・第2分冊(2月28日)
p. 147—158

▽ I 証言のずれ / II 幾つかの場面 / III 女子中学と紅衛兵 / IV 老舎の姿勢

*「老舎の死の前後に関して筆者は従来、主として胡絮青、舒乙両氏の記述からイメージを形成してきた。両氏は最も詳しく事実を知る人であるが、しかしその事実はやはり多くが自身で見たものではない。前述の傅光明編『老舎之死——採訪実録』その他の資料に接するに及んで、筆者は新たな事実を知りえたと同時に、いっそう増える小さな事実の食い違いが心につかえるのである。文革という背景の中の老舎の死という事実は、途方もなく重い事実であり、そこに一点の疑問の余地もない。その大きな事実を形成する細部の不明確さが、事実そのものの大きさ難しさを語っているのであろう。／以下、そうした証言の食い違いを点検しながら、老舎をめぐる死をめぐる幾つかの問題を考えることとする。」〔☆後略〕／本稿で引用ないし参照する主要資料は以下の通りである。／(A) 傅光明編『老舎之死——採訪實録』中國廣播電視出版社。1999年／(B) 鄭實採寫「浩然採訪録」天津『今晚報』2000年5月7日。／(C) 宋安娜、韓曉晶、白麗紀錄「關於老舎之死—舒乙報談録」『天津日報』2000年8月6日。／(D) 鄭實、傅光明採寫「自始至終我没有打過老舎」『山西文學』2001年第7期。／(E) 王友琴「學生打老師：1966年的革命」同2001年第3期。」(p. 148)

**「付記：本稿を書き上げた段階で新たな資料、鄭実・傅光明編『老舎之死——太平湖的記憶』（海天出版社、2001年7月）を編

者より送られた。資料(A)に収めるインタビューの主要な証言を再録するほか、資料(B)から(D)をも含み、さらに新たな証言を幾篇も加えているのであるが、はなはだ遺憾ながら、いまはそれを吟味して本稿に生かす時間のゆとりがない。」(p.157)

渡辺武秀「志村先生と老舎と『中日大辞典』」
『トンシュエ』第23号

(2月28日、同学社) p.6-8

*「先生は若い頃『中日大辞典』(愛知大学中日大辞典編纂処編)の編纂にも関わっておられた。確かにこの辞書の「編集のこぼれ」に「一九五七年にはさらに専任者として…(略)…東北大学中国文学科特別研究生終了の志村良治氏…(略)…らを加え、編集陣容は充実された」や「校正は二三校を志村良治…(略)…氏らのご協力を願った」という文がある。周知のように、この辞書には老舎の作品の用例もだいぶ取り上げられている。辞書だから、我々は志村先生がどこの部分を担当されたのか知る由もない。だが、この辞書の老舎の用例を読むたびに、私は、何故か、志村先生に出逢ったような気がするのである。」(p.7)

日下恒夫「二〇〇一年読書アンケート 第三回」『中国図書』(3月1日、内山書店) p.5-6

◆傅光明・鄭実編著『太平湖の記憶 — 老舎之死』(海天出版社、2001年)と張桂興編著『老舎研究叢書』(中国国際広播出版社)を取り上げる。

日下恒夫「老舎『四世同堂』と“The Yellow Storm”への覚え書き」

関西大学文学部中国語中国文学
科編『文化事象としての中国』

(3月31日、関西大学出版部)

p.293-314

▽一 『四世同堂』／二 “The Yellow Storm”

三 末尾の削除

*「ここでは、その重訳[☆馬小彌による『四世同堂』第三部『飢荒』末尾13段の中国語訳]を検討する前提として、『四世同堂』ことに第三部の「飢荒」と英語版“The Yellow Storm”に関する主として書誌的な見直しをしておく。現在もっとも詳細な書誌である張桂興『老舎著訳編目』(二〇〇〇年、中国国際広播出版社)も含め中国の書誌が親切さに欠けると、以前の書誌類には誤りもあるので、目睹しえた範囲で覚え書きを記しておくのも意味がある。なお、末尾の削除についても触れる。」(p.294)

大宅利美(担当講師)

「柳家大院 [聴いて楽しむ中国名作小説]」(『聴く中国語』日中通信社)

〈対訳・CD付き〉

第一回：2002年4月号(4月1日)

p.67-73

*「名作文学を耳で楽しむこのコーナー、[後略]。今月号からは、老舎の「柳家大院」を4回連載でお届けします。最近になって、老舎がノーベル賞候補になっていたというニュースが入って来ました。今年は中国に老舎ブームが吹き荒れるかも？」(p.68)

第二回：2002年5月号(5月1日)

p.67-73

第三回：2002年6月号(6月1日)

p.67-73

第四回：2002年7月号(7月1日)

p.67-73

竹中憲一「老舎の生家 — 小羊圈胡同」

『北京歴史散歩』(4月30日、竹内書

店新社) I 胡同に眠る現代史

p. 73-78

* 「本書は、一九八八年六月〔☆三十日〕徳間書店より刊行されました『北京歴史散歩』に二〇〇一年の〔☆内田和浩（竹内書店新社）〕取材の新資料を加筆した。〔★本文にも一部改訂あり〕」（p. 375）

** 内田氏のコメント（■最新の北京より）：「西城区小楊家胡同 8 号／民家のため参観できない。近所の人の話では、もとは四合院だったが増築をかさねて往時の様子とはだいぶ変わっているとのこと。」

◆カット写真：「老舎の生家」

杉野元子「〔書評〕 貴門胤裔（きもんいんえい）

《上・下》（葉広苓（イエ・グワンチン）著、吉田富夫訳 中央公論新社 各 2、400 円）」

『北海道新聞』5 月 12 日

* 「この小説が異彩を放つのは、満州族特有の価値観や風俗習慣がきめ細やかに描き込まれていることによる。1899 年生まれの満州族作家老舎は 1960 年代初め、自分の家族をモデルとした小説「正紅旗下」に着手し、19 世紀末北京に暮らす満州族の生活風景を見事な筆致で活写したのだが、文革開始後まもなくして自殺に追い込まれたため、作品は未完のままとなった。もはや老舎のような力量をもつ満州族文化の語り手は現れないのではと思っていたが、このたび本書によって葉広苓の存在を知ったことは大きな驚きであり、また喜びである。」

“補白” 老舎

辛 彦

◆種村季弘と老舎

2003 年 2 月 2 日『朝日新聞』読書欄に『中国文学の愉しき世界』（岩波書店、2002 年 12 月 19 日）の書評が掲載されている。

評者は、種村季弘。その一段に曰く、

「それはそうと、ここで若き日に百円の線装本〔☆四部備用本『世説新語』上海中華書局、鈴木虎雄蔵書〕に遭遇してからの博大な読書体験を披露しているのは、著者の井波律子さん。もともとフランス文学志望だったのが、学部入学で中国文学専攻に切り替えたのだそう。ところが、これがいたって狭き門だった。中国語はずぶの素人に近い。それがいきなり演習で老舎を読まされる。しごきにしごかれた。おかげで中国三千年の文化を自在に享受できるようになった」と。

この件、『中国文学の愉しき世界』からの直接の引用でもう少し詳しく補うと次の通り。

「吉川〔☆幸次郎〕先生にはじめてお目にかかったのは、中国文学を専攻することに決め、届けを出した直後のことだったと思う。六四年の二月末だったろうか。そのとき、中文専攻志望者は五人で、そのうちわたしをふくめて三人が女子学生であった。なんでもこのように大挙して女子学生が中文に来たことは、空前の珍事だったそうである。しかもこの三人の女子学生は、わたしもうひとりが教養部で L 4 というフランス語を第一外国語とするクラスの出身であり、あとひとりが理学部からの転学部者というわけで、そろいもそろって、中国語の基礎的勉強が不十分であった。／そこで三回生になる直前、この三人が吉川研究室に呼ばれ、四月からの本格的授業が始まるまえに、発音を中心とする中国語の特訓を受けるように、吉川先生から申しわたされた。特訓は春休み中、三月中旬からはほぼ一か月週三回、吉川先生、清水茂先生、尾崎雄二郎先生が担当してくださること

になった(小川環樹先生は渡米中であった)。若くて無知なわたしたちはしごく平然としていたけれども、いまから思うと空恐ろしいほど贅沢な話である。」(「吉川先生のこと」p 191)

さて、この「空恐ろしいほど贅沢な」特訓が終わると、いよいよ三回生の授業。

「当時、三回生むけの演習は第一演習といい、当初の予定では吉川先生は担当されなはずだった。ところが、巴金の『寒夜』をなさることになっていた尾崎先生が、眼のご病気でしばらくお休みなさることになり、急遽、吉川先生が代わりに出られることになってしまった。」(p 193)

というわけで、先に引用した種村季弘の紹介に従うと、吉川先生が「老舎」作品をなさることになるのだが、豈はからんや。

「この吉川先生の『寒夜』の演習ほど、つらかったものはない。」

確かに、井波先生が吉川先生から「しごきにしごかれた」のは事実である。その「凄まじいトレーニング」の詳細は、読者諸氏が実際に同書をお手になさることを希望するが、ただし、それは「老舎を」ではなくて、「巴金を読まされ」てのことであった。

はて、この間違いはどのようにして生じたのだろうか。まさか、印刷段階での誤植ということはないかろう。

種村氏が、井波先生の老舎『四世同堂』に関する文章(本誌第14号倉橋幸彦編「老舎文献目録[★「略目」の誤植]」参照)をお読みになり、それが強く印象に残っていたのか。はたまた、種村氏が老舎に特別な思い入れをお持ちであるのか。

誰か、種村季弘と老舎の結びつきの謎を解明してみようという奇特な方はいませんか。

◆奥野信太郎訳『新月』

野崎光明編「諸外国における老舎作品の翻訳」(中山時子編『老舎事典』1988年12月20日、大修館書店、所収)は、老舎作品の翻訳を収めた書として、猪俣庄八訳(大悲寺外)を収める《支那現代文芸叢刊第2輯》(伊藤書店、1940年[★昭和14(1939)年の誤り、書名は『蠶』])に次ぐものとして、奥野信太郎訳(月牙児)を収めた《現代支那文学全集第5巻》(東成社)を採る。

しかし、この奥野信太郎訳(月牙児)については、佐藤一郎編による奥野信太郎の「著作目録」(『奥野信太郎 回想集』昭和46年6月15日、三田文学ライブラリー発行)には採られていない。

しかも、「著作目録」には、翻訳本【その他】に、《現代支那文学全集第九巻[女流作家集]》と《現代支那文学全集第十巻[隨筆集]》を収めているわけで、同全集の第五巻のみを遺漏することはありえない。

ところで、この東成社版「現代支那文学全集」は、出版見本(後述の既刊本にもラインアップあり)によると、全十二巻刊行予定。

その第五巻が「奥野真太郎」、書名『新月』。もちろん、野崎氏が採録した翻訳書は、これを指すのであろう。

因みに、この書の内容見本における紹介文を引用しておこう。

「支那作家の大部分が南中支人で、其の描くところ亦南中支那の風物である間にあつて獨り老舎は好んで純粹な北京語を驅使して京津間の事情を描寫し異彩を放つてゐる。文體輕妙、ユーマア[★ママ]を有する一面、辛辣な人生批評と温かな涙を藏する作風は、恰もチェホフの作品を思はせる。」

おそらくこれは奥野信太郎自身の筆によるものであろうが、この巻が「老舎巻」であったことを示唆する唯一の証言になっている。

ただしこれだけでは、この巻に、〈月牙児〉以外にどの作品が翻訳される予定であったのかという興味深い点について窺い知ることが出来ないのが残念であるが。それはともかく、この巻の出版は幻に終わった。例えば近藤春雄は、『現代中国の作家と作品』（新泉書房、昭和24年10月20日）において、『現代支那文学全集』は「八冊」（p34）とする。

これを、現代中国文学に関する研究文献及び翻訳を最も網羅することで定評のある『現代中国文学研究文献目録 — 増補版 — （1908—1945）』（汲古書院、1991年2月）で補うと、東成社版《現代支那文学全集》は第一・二・三・四・六・九・十・十二巻の「八冊」だけが刊行され（第四巻は書名を、内容見本の蕭軍『江上』から『愛すればこそ』に変更）、老舎『新月』を含む他の四巻（第五・七・八・十一巻）は未完、ということになる。

ついでながら、第九巻『女流作家集』（昭和15年6月20日）は、内容見本では、「奥野信太郎訳」とするが、実は武田泰淳・猪俣庄八との共訳。全十篇のうち、冰心「最初の晩餐會」・廬隱「悲しみの記」・丁玲「松子」の三篇を奥野信太郎が担当。

第十巻『隨筆集』は、内容見本では、「増田渉・松枝茂夫・岡崎俊夫・飯塚朗・小野忍訳」とするが、こちらは茅盾「わが研究を語る」と吳克剛「魯迅とエロシエンコ」の二篇が、奥野信太郎の訳である。

また未完の第八巻沈從文『八駿圖』も、奥野氏の翻訳予定であった。

ことほど左様に、奥野信太郎が東成版《現代支那文学全集》の出版に深く関わったのも事実である（増田渉「奥野さんを憶う」（『奥野信太郎 回想集』所収）参照）。

さて、話を元に戻す。

野崎氏は「諸外国における老舎作品の翻訳」において、この幻の老舎翻訳を採られた。とは

いえ、同書の発行年を「1940年以後」とあいまいに記すことにより、同書に関しては「未見」であることを、そっと告白もされている。ここに、書誌にたずさわる者としてのせめてもの良心を示されたのであろうか。

内容見本恐るべし。

事務局便り

◇2002年度大会は7月26日〔金〕、早稲田大学で開催。発表者とテーマは次の通りです。

稲田直樹：「駱駝祥子」をめぐって
藤井 宏：短編小説「歪毛児」の特異性
司会（平松圭子）

日下恒夫：アメリカから帰った老舎
孫 鈞政：老舎の京味児語言

司会（倉橋幸彦）

◇2002年度総会において下記のように新しい代表委員と事務局の移転が承認されました。

代表委員：日下恒夫

事務局：関西大学中国語中国文学
（日下）研究室

◇それにともない会報編集も大阪に変わりました。一層のご協力をお願い申し上げます。

◇住所や所属を変更された方は、お手数ですが事務局までご一報下さい。

◇来年は、老舎研究会設立二十周年、この節目のときにあたり、会の越し方行く末に思いをはせるのも意味あることでしょう。

◇本号の編集についても、執筆者各位に無理をお願いしました。また、本号の印刷も好文出版のお骨折りによる。心より感謝いたします。

老舎研究会会報第17号（2003年8月1日）

〒564-8680 大阪府吹田市千里山東3-3-35

関西大学中国語中国文学（日下）研究室

老舎研究会事務局

TEL：06-6368-1121（代表番号）

